

小学生版 4・5・6年生ブックリスト



ビーだま



2014年 No.44

<編集・発行>

富山市立図書館

富山市丸の内1丁目4-50

電話 076-432-7273

平成26年10月27日発行

(年2回発行)

2014年1月～6月に図書館に入った本の中から、
とくにおすすめの本をしょうかいします。



よこやまらいた りっこうほ 5年2組横山雷太、児童会長に立候補します！

いとうみく／作 鈴木びんこ／絵 そうえん社



雷太は、四人の友だちと“なんでも屋”を始めました。学校へわすれ物をとりに行ったり、うわばきをあらったり犬のさんぽをしたりするのです。

そんな四人に、めんどろないらいがまいこみます。児童会長になって、学校を変えてほしいというのです。児童会長は、放課後の活動も多く、遊ぶこともできないので雷太たちは、こまってしまいます。いらい人は、去年の選挙のときに1票差で負けた、6年生の新藤君しんどうでした。

七夕の月

佐々木ひとみ／作 小泉るみ子／絵 ポプラ社



かずや
和也は、病気のおばあちゃんから、“まぼろしの七夕かざり”を見つけてほしいとたのまれます。和也と同じクラスのアキは、さっそく七夕かざりでうめつくされたふき流しの森をさがに行きました。

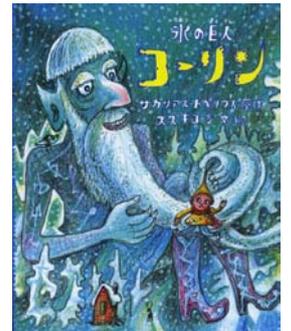
すると二人の前に、小さかったころのおばあちゃんがあられ、ふき流しの中へと消えていったのです。

氷の巨人コーリン

サカリアス・トペリウス／原作 スズキコージ／文・絵 集英社

その昔、はるか北のヨートウンヘイムという村に、氷の巨人コーリンが、住んでいました。コーリンは、100年にいちど目をさまし、世の中を見わたします。

ある年、目をさましたコーリンは、人間がどれくらい、頭が悪くなったか見たくになりました。そこで人間の子どもをつかまえ、なぜなぜがっせんをすることにします。



メリサンド姫 むてきの算数！

E・ネズビット／作 灰島かり／訳 小峰書店



メリサンド姫は、悪い妖精に、かみの毛がはえないのろいをかけられ、はげ頭にされました。

大きくなった姫は、魔法の小箱に「一メートルの長さのかみのはえますように。毎日三センチのび、切るたびに、倍の速さでのびますように」とお願いします。すると動くこともできないほど、かみがのびてしまいました。

手作り小路のなかまたち

新藤悦子／著 河村怜／絵 講談社



手作り小路には、ぼうし屋やボタン屋など手作りの商品のお店があります。

ある日、小さなきょうだいが、お母さんのほしいものが全部くっついたすてきなぼうしを作ってほしいとやってきました。むずかしい注文でしたが、手作り小路のみんなはちえを出し合います。



海をわたったビスク・ドール マジック・ドール①

ジョーン・ホルブ／作 かとうあさこ／訳 国土社

ローズとリラのおばあちゃんは、こわれた人形を直すお医者さんです。ある日、顔がひびわれたビスク・ドールが持ちこまれました。

人形と話ができるおばあちゃんは、人形が見てきたことを二人に語りだします。それは、百年も前にロシアからアメリカへ渡ったビスク・ドールと少女の長い旅の話でした。

*ビスク・ドール…磁器（土をねり固め焼いたもの）で体を作った人形



あしたも、さんかく 毎日が落語日和

安田夏菜／著 宮尾和孝／絵 講談社



ゆくえふめいだったじいちゃんが、四年ぶりに圭介たちの前に現われました。もと落語家のじいちゃんは、家族の反対にあっても、まだ落語のゆめをあきらめきれません。

圭介は、そんなじいちゃんをおうえんしたくなり、売りこみ作戦を開始することにしました。手始めに「グレート・さんかく」という名前を思いつきます。

母さんが消えた夏

キャロライン・アダーソン／著 田中奈津子／訳 講談社



カーティスとアーティーの母さんが、なぜか家に帰ってきません。子どもだけでいることがわかれば、二人はしせつに入ることになります。

二人は、近所に住むバートさんの力を借りて、山小屋で母さんの帰りを待つことにしました。楽しくすごすうち、小さいアーティーは、母さんのことをわすれていきます。

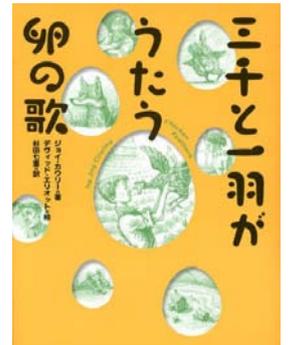


三千と一羽がうたう ^わ卵 ^{たまご}の歌

ジョイ・カウリー／著 杉田七重／訳 さ・え・ら書房

年老いたメンドリ、セモリナは人間の言葉が話せます。このことは、かい主の少年ジョシュしか知りません。

セモリナの他に、三千羽のにわとりがくらす ^{ようけいじょう}養鶏場では、最近、卵の数がへっていました。ジョシュはキツネのしわざと考え、セモリナに協力を求めます。その直後、セモリナは何者かと争ったあとを残して、消えてしまったのです。



やりがたけさんちよう ^{やりがたけさんちよう}槍ヶ岳山頂 (えほん)

川端誠／作 BL出版



少年は、父さんにつれられて、槍ヶ岳をめざしました。初めての山登りはつらく、父さんがかける声も耳に入ってきません。

とうとう、山のちょうじょうに立ったとき、苦しかったことをすっかりわすれていることに気がつきました。山のけしきは美しく、なみだで声も出ません。

【 執筆：山田（婦中図書館） 】